

特別講演
「川をめぐる
国際交流」



多摩市教育委員会 清水哲也 教育長

英国からの特別ゲストお二人より、多摩川とテムズ川をきっかけとした多摩市とサウスエンド市の国際交流の実例や教育現場への影響などが発表されました。



講演Ⅰ「テムズから多摩へ 2012」
サウスエンド・エデュケーション・トラスト
サンドラ・ロバーツ CEO



講演Ⅱ「サウスエンド・オン・シーの学校生活」
チェイス高校 アリソン・ドミニー 副校長



多摩市立多摩中学校 生徒

英語
スピーチ

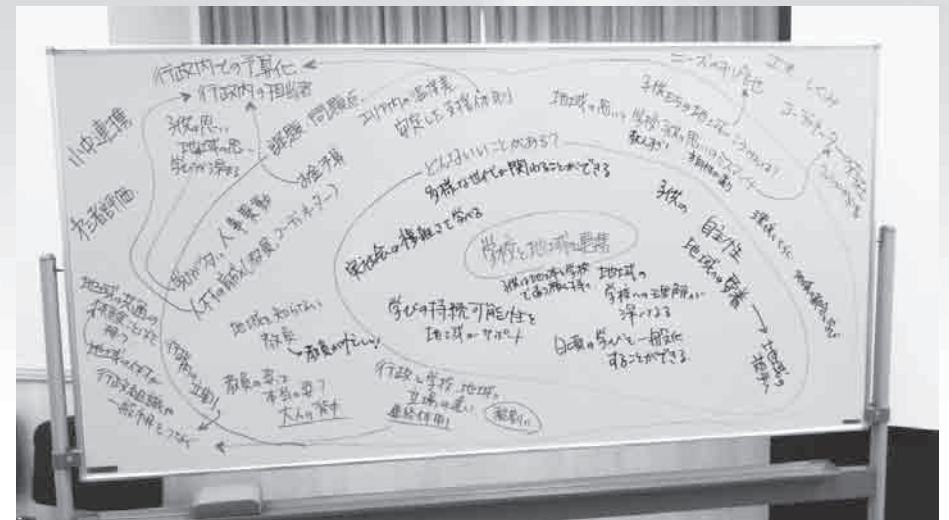
各分科会報告

地域との連携

ファシリテーター：多摩市立青陵中学校 佐々木雅一 教諭

当分科会には、学校関係者、地域の方、大学関係者など40名弱の参加がありました。まず4校の小学校から地域と連携した実践報告をしていただきました。各校共通するのは学校側が積極的に地域の宝物さがしをしている点でした。教員が地域を魅力的にとらえることが学校と地域の連携の出発点であると改めて実感しました。

その後の協議で、学校と地域と一緒に教育を行うメリット、課題、課題解決のための工夫の3点について、参加者全員でアイデアを出し合いました。地域と学校が共に教育を進めることで、子どもたちは多様な人とふれあう機会を得て、社会の複雑さを学べるというメリット以外に、活動自体が長続きする、学校への理解が深まるなど、学校経営上のメリットも浮かんできました。一方、学校と地域のスタンスの違いや、学校側の人事異動による影響などの課題も見えてきました。地域コーディネーターの重要性や、将来的には行政内にESDの担当者を置き、安定した支援体制の確立も必要であると議論が深まりました。



各分科会報告

はぐくみたい力・学力

ファシリテーター：多摩市立連光寺小学校 関口寿也 副校長

ESDにおいてははぐくみたい力や学力は何かと問われたとき、未来を見据えるESDの理念と、昨今声高に言われている学力との関係性は一見分かりづらい。4校の実践発表は、それを分かりやすく説き明かしていただいた。(1)基礎学力の上にある問題解決力。それがESDで育てるものである。(2)総合的な学習の時間を中心として、行っている学習を、組み直し、関連付けし、繋げていくことが大切である。(3)地域の鍵は何なのか、それがESDのヒントとなり、学力の向上につながる。(4)学力の向上には、継続していきける組織やカリキュラムが必要である。

この発表を基に、小グループに分かれて討論をおこなった。そこで明らかになったことは、(i)現在行っている学習活動を有機的に繋げていくことで、問題解決力を育てる。(ii)育てたい能力を明確にすることで、ESDの内容が見えてくる。(iii)児童の資質能力の向上には、教職員の異動によって変わらない総合のプログラムが必須である。(iv)総合には“しかけ”が必要である。なぜこれが必要かと考えさせることが、持続可能性につながり、問題解決力をはぐくむ。というヒントが見えてきた。地球規模での希求の問題を乗り越えるために、ESDを通した学力の向上が求められている。



学校間交流

ファシリテーター：多摩市教育委員会 中谷愛 指導主事

発表者の方々からは、手紙、絵画、写真、ビデオレター、テレビ会議等のツールを効果的に活用した工夫された実践が報告された。交流の意義は、「児童・生徒が自分の考えを発信できる力」を身につけられることが共有された。さらに、継続的に交流を進めることによって、発信力とともに、住んでいる地域への誇りや、地域をふるさとであると思う心を育てることにつながることも確認することができた。

これらのことを踏まえると、交流の計画を立ち上げる際は、1年限りの内容ではなく、中長期的に、少なくとも数年計画でじっくりと行うことを視野に入れて進めていくことが、一定の成果につながると考えられる。また、交流を充実させていくためには、校内の連携はもとより、地域のさまざまな方々と協働しながら進めていくことが重要となることから、開かれたネットワークを構築していくことの重要性についても、あらためて確認することができた。



※学校間交流の分科会は2ヶ所に分かれて行われました。

各分科会報告

校内体制

ファシリテーター：多摩市立東愛宕中学校 富田広 校長

事例発表 概略

- 発表1 校内研究にESDをとりあげる（多摩市立東寺方小学校）
今までの活動をESD的に組み替えていながら、校内体制としては「ゆっくり理解を深める」ことが大切で、急な動きは共通理解を得られず混乱する危険がある。また、地域の教材化、人材活用など、息長く継続させる体制が必要である。
- 発表2 輝く命を未来に繋ぐ教育＝ESD（横浜市立永田台小学校）
教育活動をESDにゆっくり染める（気づき→実行→続ける→価値付ける）ような体制が必要である。「命の授業」では人、もの、こととの出会い、繋がりを大切にしながら、多角的な知識や総合的な視点を大切にしながら年間を通して進める必要がある。
- 発表3 教育課程編成からPTA・地域を巻き込み、ESDのパワーアップ交流会の開催まで、ESDを踏まえた学校づくりのノウハウについて（江東区立八名川小学校）
校長自身の問題解決能力が大切で、教育課程にESDを明確に位置付けをすることから体制を整えたい。その際、ESDカレンダーや単元展開表を活用し、横断的に総合的にESDを進める必要がある。
- 発表4 「学びをつなぎ未来をえがく子」を育成する教育課程の編成（柏崎市立北鯖石小学校）
今までの教育活動をESD的視点で見直す体制づくりから始め、「三つのつながり」の視点で進めてきた。特に、未来をえがく子としては、事象と事象、自分と事象、自分の学びの繋がりに気づき、仲間や社会へ働きかけ、よりよい社会の形成に参画させたい。

まとめ

ESDを教育課程に明確に位置づける必要がある。その際、慌てず、今までの教育活動をESD的視点で見直し、教職員の共通理解を得ることが出来る体制が必要である。



高等学校における交流活動

ファシリテーター：神奈川県立有馬高等学校 望月浩明 総括教諭

高等学校のグループでは海外の学校と交流活動を行っている事例が多く出されました。インドネシアの高校と共通の環境問題をテーマに学習活動を連携しながら実施し、一冊の本にまとめた取り組み。17校の海外姉妹校から生徒が来日し共通のテーマで学びあう国際フォーラムの取り組み。さらに、海外修学旅行等の機会に、現地校や現地NGOと環境問題、異文化理解などのプログラムを一緒に実施するなどの実践が報告されました。

一方で通学範囲が広範囲になるため地域との交流をどう進めたらよいか、という話題も出て、地域のユネスコ協会や住民の方々などと連携しながら地域交流・地域理解を進めるといった事例が報告されました。

また、最初は学校主導型のイベントを中心としたプログラムから始まるが、次第に生徒主体のものへ移行させることが大切だという声も多く聞かれ、海外の高校生と共同作業で科学実験を実施し交流を深めた例やユネスコクラブの活動についての説明がありました。

